

ある時はバーテンダー ある時は臨床宗教師

京都・祇園の路地にある小さなバー「18 (エイティーン)」(京都市東山区)のバーテンダー、柱本惇さん(27)は、浄土真宗本願寺派(本山・西本願寺、京都市下京区)の僧侶で、「臨床宗教師」というもう一つの顔を持つ。苦しむ人たちの心のケアを実践する宗教者のことだ。「全く違うようでいて、人の心に寄り添うという基本はバーテンダーも臨床宗教師も同じ」と、静かにウイスキーをグラスに注ぐ。【花澤茂人、写真も】

京都市内にある本願寺派の寺の長男に生まれた。大学卒業後に西本願寺の職員として勤務もしたが「儀式だけでなく、僧侶として実際に人と触れ合うことの大切さをきちんと学びたい」と龍谷大学大学院の実践真宗学研究科に進学。昨春始まった臨床宗教師の養成プログラムを受け、今年1月に修了した。

# 寄り添う基本 同じ



静かにグラスを差し出す柱本惇さん  
—京都市東山区で

研修は、座学だけでなく、高齢者福祉施設や緩和ケア施設などでの実習もある。昨年6月に東日本大震災の被災地を訪れた際、仮設住宅で暮らす被災者から「僧侶として、ここに何をしに来てくれたのか」と問われた。返答に詰まり、無力さを痛感した。

しかし、研修を続けるうちに気づいた。「苦しむ人たちに何かをしてあげよう」と思っていたが、僧侶だからと言って、自分は何も

できない」と。そして何もなくても「ただそこにいること」の大切さも分かった。

2年ほど前から別のバーでアルバイトを始め、酒のことを学ぼうと読んだ本の一節が胸に響いた。「バーテンダーは透明になれ」。

そこに確かにいるが、自分からは主張せず、客の空気を邪魔しない。それでも、客に何かを求められれば最高のおもてなしをする。「臨床宗教師が目指すものと似てい

## 京都の27歳 心のケア実践

### 臨床宗教師



布教や伝道を目的とせず、末期がんの患者や被災者ら心に大きな悩み、苦しみを抱えた人たちに寄り添い、心のケアをする専門家としての宗教者。資格ではなく、決められた研修を修了した人を大学院が認定する。東日本大震災の被災地でさまざまな宗教者が活動したことを背景に、2012年4月に東北大学院で養成講座が開設された。龍谷大学院では14年度に西日本で初めて養成プログラムを開設し、今年1月には実践真宗学研究科の20～60代の大学院生11人が修了証を授与された。

る。自分と相手との間にあるのが仏教か、お酒かの違いだけだ」

昨年10月には自分の店を持ち毎夜、会社員や若い女性の悩みに耳を傾ける。今年4月からは、大阪府茨木市内の福祉施設に就職し、昼は非常勤の相談員として働く予定だ。「あなたに何ができるのか」と今問われれば、柱本さんは笑顔でこう答えると決めている。「ただ、お話を聞かせていただくといいんです」